



ヨハクフォーラム 2026

精神保健医療福祉における人権と地域生活支援を考えるシンポジウム

精神科医療と、地域でのケア・暮らし・福祉の実践から考える

令和8年 8月30日(日)

時間

13:00 ~ 18:00 (開場 12:30)

会場

ウエスタ川越 (埼玉県川越市) 川越駅西口より徒歩約5分

参加対象

精神保健医療福祉ユーザー・家族、医療・福祉関係者、行政関係者、教育関係者、一般市民 等

参加申し込みは Peatix にて受け付けております

サイトへのアクセスは右の QR コードもしくは下記のリンクから：

<https://peatix.com/event/4965346>



主催

一般社団法人 SCRAP&BUILD / ヨハク

ヨハクフォーラム 2026

精神保健医療福祉における人権と地域生活支援を考えるシンポジウム

精神科医療と、地域でのケア・暮らし・福祉の実践から考える

本法人ではこれまで、精神科病院から地域生活への移行を支援する「退院支援」に継続的に取り組んでまいりました。実践を通して、地域での生活を希望する方が安心して暮らし続けるためには、医療の関わりだけでなく、福祉的支援、居住をめぐる支援、家族への支援、そして日々の生活を支える関係づくりが欠かせないことを実感しております。

一方で、退院支援を進めるうえでは、精神科医療における人権の観点（薬物療法、身体拘束等を含む）や、地域での支援体制の整備、関係機関の役割および連携のあり方について、引き続き検討が求められています。

本シンポジウムは、退院支援に取り組んできた立場から、精神科医療における人権の視点と、地域でのケア・暮らし・福祉を支える実践の視点を持ち寄り、医療・福祉・看護・家族・当事者等、さまざまな立場の方々とともに、今後の退院支援および地域生活支援が円滑に進むための医療・福祉のあり方、ならびに地域における支援体制の整備と連携の促進について検討することを目的として開催します。

本取り組みを通して、精神科に通院している方が地域で安心して生活を継続できる環境づくりに資することを目指します。

参加対象

精神保健医療福祉ユーザー・家族、医療・福祉関係者、行政関係者、教育関係者、一般市民等

参加費

会場参加（100名） オンライン参加（100名）
専門職：3,000円 一律：3,000円
その他：1,500円

後援

川越市、公益社団法人 日本精神保健福祉士協会、NPO 法人 全国精神障害者地域生活支援協議会（あみ）、一般社団法人 コミュニティメンタルヘルスアウトリーチ協会（アウトリーチネット）、一般社団法人 埼玉県訪問看護ステーション協会、公益社団法人 埼玉県社会福祉士会、一般社団法人 埼玉県精神保健福祉士協会、一般社団法人 埼玉県作業療法士会、西武文理大学、埼玉新聞社、社会福祉法人 朝日新聞厚生文化事業団、全国精神医療労働組合協議会、社会福祉法人 川越市社会福祉協議会、川越市精神障害者家族会やまぶき会、川越市チューリップ親の会、全国地域移行支援協会かけはし、TOMY'S ACTION CLUB、訪問看護ステーションスクラム（川越市）、訪問看護ステーション彩（川越市）、はん訪問看護ステーション（川越市）、就労継続支援 B 型事業所 able! FACTORY（川越市）、就労継続支援 B 型事業所 スタジオワークデザイン（川越市）、NPO 法人 山正（川越市）、医療法人 瑞穂会（川越市）、社会福祉法人 さくら瑞穂会（川越市）、グループホーム ピクニック狭山（狭山市）、グループホーム トリポ狭山（狭山市）、NPO 法人 ヒールアップハウス（川口市）、一般社団法人 Q-ACT（福岡）、合同会社 ACT ひろしま（広島）、一般社団法人 パロム（板橋区）、NPO 法人 サポートあおい（川越市）

はじめに

山内智史
（ヨハク主任相談支援専門員）
「精神科病院からの退院支援の実践」



【第1部】精神科医療における人権を考える



石原孝二
（東京大学 / 哲学者）
「精神科の薬と人権」



長谷川利夫
（杏林大学 / 研究者）
「身体拘束と人権」



長嶺真智子
（東京武蔵野病院 / 看護師）
「精神看護と人権」

【第2部】地域でのケア、暮らし、福祉を考える



青木聖久
（日本福祉大学 /
精神保健福祉士）
「精神保健福祉と地域生活支援」



金子公重
（利用者家族）
「家族の視点から」



星野概念
（澁谷川診療所 /
精神科医）
「対話とケア」

各部のおわりに総合討論・会場とのディスカッションの時間があります。
最後に全体討論の時間があります。

クロージング



戸田竜也
（ヨハク代表理事）





ヨハクフォーラム 2026

資料集

精神保健医療福祉における人権と地域生活支援を考える

— 精神科医療における人権と、地域でのケア・暮らし・福祉の実践から —

2026 年 8 月 30 日（日） 13:00～18:00

会場：ウエスタ川越 / 多目的ホール D

主催：一般社団法人 SCRAP&BUILD / ヨハク

ヨハクフォーラム 2026 について

私たちヨハクは、精神科病院から地域生活への移行を支えるなかで、病院を退院することだけではなく、その人が地域のなかで自分の生活を続けていくために何が必要なのかを考えてきました。

住まい、家族との関係、経済的なこと、医療との付き合い方、日々の暮らしを支える人との関係。地域で暮らすということは、こうしたさまざまなことが重なり合う営みです。

一方、精神科医療のなかでは、本人の意思とは異なる入院や身体拘束、薬物療法をめぐる問題など、「治療」と「人権」をどのように考えるのかという問いが今も残されています。病院のなかで起きていることと、地域で暮らしていくことは、決して別々の問題ではありません。

ヨハクフォーラム 2026 では、医療、福祉、看護、哲学、家族、当事者、地域支援など、異なる立場からこの問いに向き合ってきた方々に集まっていただきます。

第1部では「精神科医療における人権」をテーマに、薬物療法、身体拘束、精神看護などを手がかりに考えます。第2部では「地域でのケア、暮らし、福祉」をテーマに、病院を出たあと、あるいは病院に頼りきらずに地域で暮らしていくために、どのような支援や関係が必要なのかを考えます。

このフォーラムでは、登壇者の話を聞きながら、それぞれが感じたことや、自分自身の経験と重なったこと、違和感や迷いも含めて持ち寄り、会場にいる皆さんと一緒に考える時間にしたいと思っています。

一般社団法人 SCRAP&BUILD／ヨハク

代表理事 戸田 竜也



— 活動や実践を YouTube でご紹介しています —

PROGRAM

当日プログラム

YOHAKU FORUM 2026

時間	内容	登壇
13:00	オープニング	
13:10	ヨハクの取り組みについて	山内智史／ヨハク
13:25	精神科の薬と人権	石原孝二／東京大学
13:45	身体拘束と人権	長谷川利夫／杏林大学
14:05	精神看護と人権	長嶺真智子／東京武蔵野病院
14:25	講演後企画	甲田月／ヨハク利用者
14:40	登壇者ディスカッション	第 1 部 登壇者
15:05	休憩	
15:20	家族の視点から	金子公重ほか (佐藤伊鞠／中村昌平／有村慧)
15:40	精神保健福祉と地域生活支援	青木聖久／日本福祉大学
16:00	対話とケア	星野概念／澁谷川診療所
16:20	リフレクティングトーク	前澤明美／菊地嘉通／笠井翔太
16:35	登壇者ディスカッション	第 2 部 登壇者
17:00	休憩・質問回収	
17:15	登壇者全員による最終ディスカッション	
17:45	クロージング	戸田竜也／ヨハク
18:00	終了	

SPEAKERS

登壇者・出演者プロフィール

YOHAKU FORUM 2026

石原 孝二 東京大学／教授

様々な経緯があり、2010 年頃から、精神医学・精神医療の哲学や歴史を中心に研究するようになりました。特に精神科の診断と薬、強制性の問題などに関心をもっています。2021 年からは、東京精神医療人権センターで電話相談や精神科病院への訪問などの活動に携わっています。精神医学・精神医療の領域は、他の領域とは異なる論理や考え方で動いていて、びっくりすることが多いのですが、社会の構造や価値観をダイレクトに反映している領域なのだと思います。

長谷川 利夫 杏林大学／教授

1987 年 國學院大學法学部法律学科政治学コース卒業（法学士） 2010 年 新潟医療福祉大学医療福祉学研究科保健学専攻博士後期課程修了（保健学博士） 2011 年 杏林大学保健学部作業療法学科 教授 現在に至る。（主な著書）『精神科医療の隔離・身体拘束』（日本評論社） 2013 年（単著）（主な論文）“The use of mechanical restraint in Pacific Rim countries: an international epidemiological Study” Epidemiology and Psychiatric Sciences Cambridge University Press 2020 年／「『身体拘束』からみる失われる民主主義」「世界」 2023 年 5 月号 岩波書店（主な学会活動等）一般社団法人 日本身体拘束研究所 理事長／日本病院・地域精神医学会 副理事長／精神保健従事者団体懇談会 代表

長嶺 真智子 一般財団法人 精神医学研究所附属 東京武蔵野病院／看護師

内科小児科・脳神経外科勤務を経て 2001 年、北陸の精神科病院に勤務。2012 年、東京武蔵野病院に入職し、2014 年、精神科認定看護師（精神科薬物療法看護領域）に登録。2023 年から、一般社団法人日本精神科看護協会 東京都支部教育委員。同年、「身体拘束を考える精神医療従事者の会」を立ち上げ、厚労省に身体拘束に関する要望の申し入れ、精神医療従事者が目撃した身体拘束に関する実態調査などの活動をしている。2024 年より、日本病院・地域精神医学会理事、精神科認定看護師の会副会長を務めている。

青木 聖久 日本福祉大学／教授

大学4年生の時に、精神障害がある人と出会い、精神保健福祉領域に自分の居場所があると感じました。その後、岡山や兵庫の精神科病院に約14年間、小規模作業所に4年間、ソーシャルワーカーとして実践を積み重ねています。そして、普及啓発実践を本格的に展開する現場として、2006年に日本福祉大学に赴任し、21年目になります。常に思っていることは、自分が当事者だったら、何を求めるのか。そのことから、経済的支援としての所得保障や出費の軽減、情緒的支援としての他者の物語について追体験をする機会づくりをすべく、話したり（講演など）、書いたり（本や論文など）しています。目指していることは、「つたえる・つたわる・つながる」です。

金子 公重 利用者家族

弟が20代後半で精神科病院に初めて入院して以来、30年近くにわたり、家族としてその生活を見守ってきた。繰り返される入退院や隔離・身体拘束、薬物療法、地域のさまざまな支援を経験するなかで、「治療とは何か」「地域で暮らすために本当に必要な支援とは何か」を考え続けている。現在、弟は人生で初めての一人暮らしを送っている。家族だけで支えることの難しさを感じながら、本人も家族も無理をしすぎることなく、地域のなかで支えられながら暮らしていける仕組みの必要性を、家族の立場から考えている。

星野 概念 澁谷川診療所／精神科医

精神科医 など。精神科医として働くかたわら、執筆や音楽活動も行う。いくつかの場所での連載や寄稿のほか、著作もあり。音楽活動はさまざま。

著書に、いとうせいこう氏との共著『ラブという薬』（2018）、『自由というサプリ』（2019）（ともにリトル・モア）、単著『ないようである、かもしれない〜発酵ラブな精神科医の妄言』（2021）（ミシマ社）、『こころをそのまま感じられたら』（2023）（講談社）がある。

対話や養生、人がのびのびとできることについて考えている。

山内 智史 一般社団法人 SCRAP&BUILD・ヨハク／主任相談支援専門員・社会福祉士

大学卒業後、知的障害者の障害者支援施設や生活サポート事業に従事。入所施設からの地域移行を目標に実践を重ね、その後、川越市の委託による障害者相談支援事業に12年間携わる。日本社会福祉士会障害者支援委員会では、権利擁護・虐待防止研修や主任相談

支援専門員研修の作成に携わる。2023 年よりヨハクの管理者として、精神科病院からの退院支援を中心に取り組む。知的障害者の入所施設と精神科病院には、地域から切り離された生活が長期化するという共通した構造があると感じている。入所施設の地域移行から精神科病院の退院支援へと実践を広げ、障害のある人が地域で暮らすことの意味を考えながら支援に取り組んでいる。
